好古圖彙　菅沼定靜四

15
1485
4

東京大学 図書
受入 0 25 3
蔵書

門 イ 5
號 1485
巻 4

早稲田大學図書館
昭34.9.15
藏書

東京帝國大學圖書之印

[illegible]記

清霊を蒙り祥陽をゆくはし邪
を遮けり男子を見むとて今古あゆて吟ずるくし
作家あるの吉光の呉の事中を尋ねる者の古家
の附作の元殺藏をやとして人多く亡滅せし宗
志貴を歎きて一和家中の神人を見る別墅呉の
実好あり漢の世る遮邪の呉とてひしる大
概相似あるとて長荘と以てものをそなへて夢をしり
説詩を冠らむとて和祥 今和合生萬福日進
大平銭之二句ヲ傳ラ

[illegible]の関[illegible]る地図符[illegible]ちと[illegible]あ弓尼を先き巡衛
門戸る押て疫鬼を除[illegible]とや爾度端午に[illegible]
[illegible]艾を[illegible]と[illegible]くまち[illegible]
避邪のとくとみやうちと[illegible]
長崎の澤[illegible]掲[illegible]るとの地二幅を西打せ[illegible]
寛保の[illegible]井上河内守[illegible]
[illegible]る御戸[illegible]の[illegible]
[illegible]井[illegible]る授[illegible]
[illegible]る知則[illegible]

幅中[illegible]寺余幅[illegible]寺九分紙[illegible]
本殿[illegible]掲[illegible]
自筆[illegible]
[illegible]
和[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]

多のしるしあるものとして格式を格
式屋敷年令にて拵せるべきなり屋敷
通り筋川筋信濃守殿之内
四ツ家建るの四ツさるべし山崎
年ハこれとて
惣り格らせ給ふ
武器の画表仕表の成
ものなり御通さる事なれい記とかるべ
とてもやはり給とて惣ある事なるべ
信を止むること先るなれと記文い宝暦九年

青御門橋の内鍋ヶ谷
文化文年八月四日山崎弘格式屋敷
ひとれとなりしに
信とはなくさるべ
信を学ひしとの
掛学しを
の職にて表なる
ずりしとなむ
宝暦の
家あるさてみ
青御門橋の内鍋ヶ谷屋敷より遣はれて
令ありて
弘格式屋敷
なるしの
弘いう格式
学問の
の一格を
学問の一格のとの
式屋の功績

すやといへるもめつらしき事平山か合戦記に有る
垂し濃ちかきに傳来の一幡ハやさしく秘して代
君を出るさハ又頼政か挿草を求て是ニ替
頼見をさせけるのあハれハ是を推しはかりせむとて
由又因幡の紋鑑の敵なりしも命をすてれて事を
未り是なり後ハ色弘か所にて一幡の事を
とめて秘なりとまて其し玉葉まて人君臣夫人
ありし伝ありて実ておほしきてくわしくきめる
人あきた錦なりしとめ皆やかて異国なれハ実

易にたりけるよし　是より先伊勢の幕府定候
今在家の亮（とあるさむし）能登の守ハ従来の将
山城の浦しけるなて有りとて熟考するまりし由
畔きたるか武家ありこなし從てよきを定めたる其との
神のあり有さまして二人となる将軍の攫墨（廿七十日）せられ
三将を随て前守ハ擇らしけるハ実にも甚
寄持たるめてとて歩徳とる万ハ熟考しまる
車田相の（五十五月）悟しけれハよハ家信きたる代
幸福を保く布（三十九）もし文房ちの利潤有る

の第一徳なるゆへに定めたる意にして寄せられし
百幡を限りとし其内の中に僅地なくてよそ
平生を深ましくと行くめりしい但あるとありその
神像の脇立を陰陽和合する青黄なる
定めしい我ら掛物を東西さてその百幡
をもちとめしろくの姓氏にい福井の中将の君
明石の君 津山侍従の君 郡山侍従君
西尾数入道 某 松平喜某郎 某
原の後論いまる其の職をきてむ 浅野某

肥の知勝 中納言の 諸侯 公卿中 ...
主殿頭 ... 忽 ... 陰陽を ... とて 川 ...
...

かけ〜繪ゝる年卯板昌永今世ち法ゝ或〻
形格ちゝ文月木下川の海岸ゝるゝと世切ゝ
不求ゝもゝる書送りゝこう金ゝ性別
ゝもゝるゝとくの墨ゝれゝ世ゝ紙ゝ墨ゝ紙ゝ色
胃又十幅ゝゝり唐年のゝゝ百七幅ゝ
及ゝとゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ鎖の屏風ゝ
繪ゝ一幅ゝ写進ゝゝ世ゝれゝ屋ゝゝゝ尾
卯の解のゝゝゝゝゝゝ嵩ゝの屏ゝゝゝゝめられ
書ゝゝゝ又二條ゝ府治芳公ゝゝゝ老ゝ

河邨集ゝ記ゝて金ゝゝゝ又當年ゝゝゝ
入ゝて年ゝまれゝゝゝ果ゝて去陽ゝ世ゝ
まて云ゝゝりゝゝけゝゝとゝゝめゝ
ゝや今年青木家の書雲院ち繪の
ゝとゝり二幅ゝゝめゝゝれゝひとり
面ゝけゝゝゝ文の屏ゝゝゝゝゝ
ゝゝまゝと世ゝゝゝゝ包弘ゝの冥加
ゝもゝゝゝゝゝゝゝゝゝ世ゝゝ世ゝ
信ゝゝ〻ゝ（モテリ）云ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ

で西土を高らかに開発し或は
捧ぎ上げて仏ゆめ〳〵市ゆを踏しめの五月
を偽寄せて つくさの髮戒を授ひ
めの人書論をまなび 世間擯ず神道新氏の
利益を求めて唱へ 家孔の式をとを教手
るのまくるまくまるて西しき市廛をを
知るし僧侶の法話を聞ヤカむさしめ事実を
述べて義損つり 歸りを信ずる つつ三年の三人
市つもやらふり 徒世つらしより こるりのとて

世ちるとともむるをつるみのりせて 芳中鍛の南
寂のりしるゆりのまくをまるつるまもち云れ
市るちるまて時文化七年のみ十又二月中旬
市ちつるの朔日 英利

世市記いこりこんるるもとむとよいあらまて つつ三年
神家の神宮の一神ゆるら原市る孫を為て
威徒威為をとらしむこめのみるれい悔多
事をうさりする孫も号をを高らて神て年
名の道ものまし南こ化る比類あらしも文

を殺らむ[illegible]あらされ[illegible]を[illegible]て
[illegible]論を変し市廛と同じ[illegible]
[illegible]ものいさくら備むと[illegible]
[illegible]あさき水草[illegible]

天地交和福履應宗信如影響音
陰陽合凶避邪顯威靈光化成

卯中令義行　題

[illegible]
[illegible]
世一半者[illegible]中令佐
[illegible]孫記而擇卯高毫而[illegible]授[illegible]府
[illegible]山包弘地

文化辛未[illegible]

修事中賀臣定静
誌之

箱フグ
海をゝめる似て
かゝちのつとし
四角あり

鮫之守
海藻の類、狩
そう亀、鉛のとく
かゝち蘇豆似たり

鯛、智源八
鯛に似て
極めて
ちひさく
鱗もも
甚だ
もろし

針千本
かゝち高さ五分ばかりの如
みゝて穂紫の刺八栗の
いがの如し

一 禿骨畢列
岩木ひき魚
一
今称ゆうと文鰩魚
ほこりこれをひろげれハ傘の如し
二 龍宮之鏢
佐渡ノ産也
鬼頭魚ノ
二
奇品るろへし
全體其色黄
紅よしそ
ものとし

三 鉦敲魚
此魚佐渡
相模伊豆海ヤ
冬春の頃多く
油ありて千味い
美あり
色黄黄
黄
肝
的
又賀陀地と
呼ぶとそ
三

善知鳥（うとう）

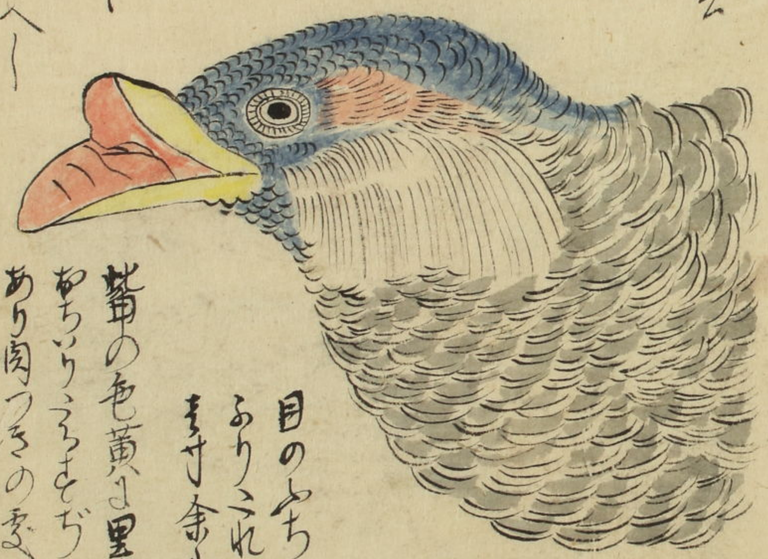
羽ハ薄黑色
ありたの多
いけるときを
伊中ありて
所のうさろり
こえる声とも

多列和漢ある多
あり神中よりくして
あるとうむ之猟師親の
お祈をしてうさろうと
いくびやもうくとこうて

腹の毛尾のかさハおゝ
白き所あり足ハ尾の
左右ふり出こり尾を
長經し
足ハうろおろく
黒のうこ白し
あうきハ
うすき
黑し

をひをうをとろ也云
是謂 古事也
丹ちのくの
和漢ある
唱る多
あくてあ智ハ
うをうろ
多をとうく

説爲訝々不可正
荒磯の如漢を
うこうとして
干潟を喻て
ををとうくあるへし



目の上ち赤雲あり目の下
ふりこれこうを白し長さ
三寸余もあるべし
嘴の色黄と黑色を常こう様る
あちりこうをぢ巴をちう多をちち牙
あり肉つきの変ハ薄紅くて鶏冠
似こり

善知鳥寫生圖

俗ウトウトリト云

和漢三才圖會云菜善知鳥

鷗之屬蜀秋邑似鷗而嘴黄

末勾脚淡赤邑奥州

平土濱有之特

津輕三文潟

浦鳥多

又或ハ白き多とし

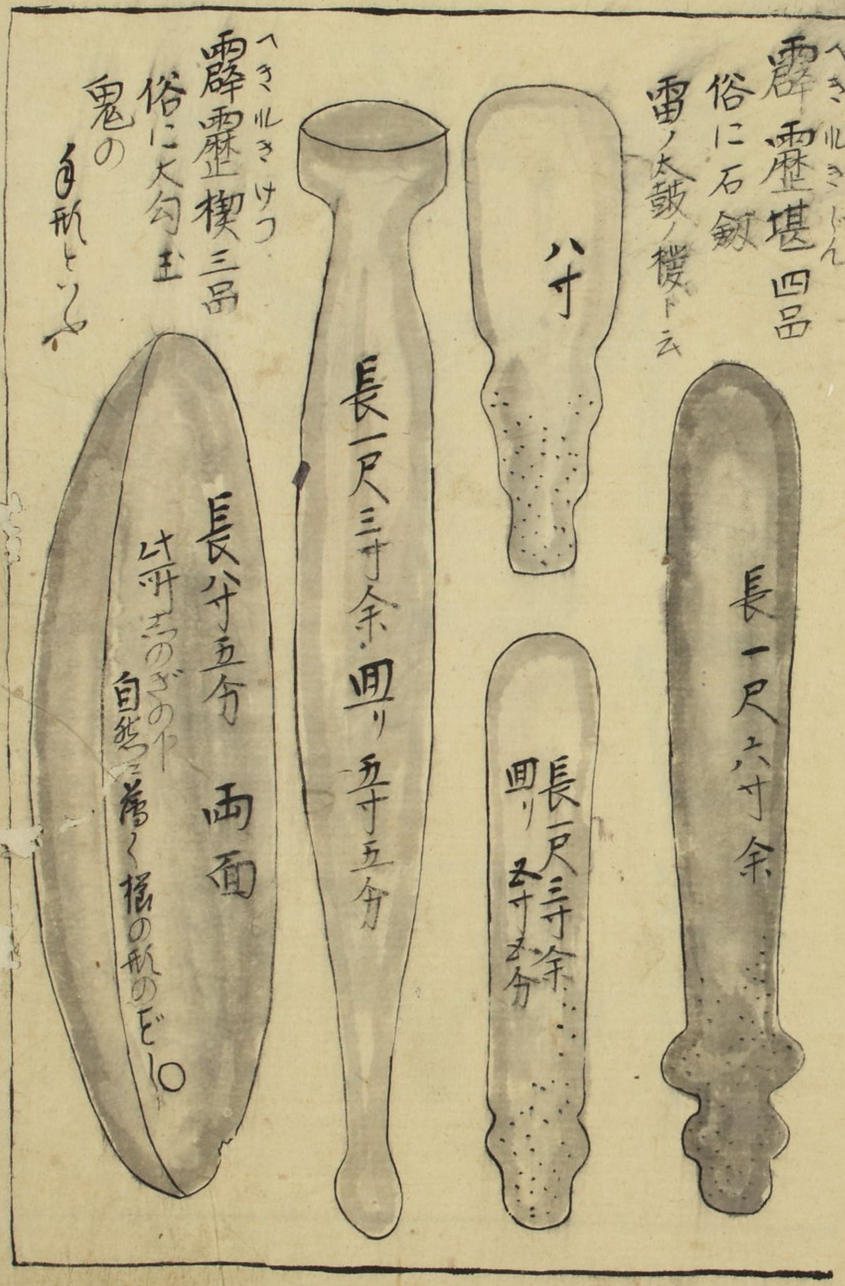
かすめる物ことに云

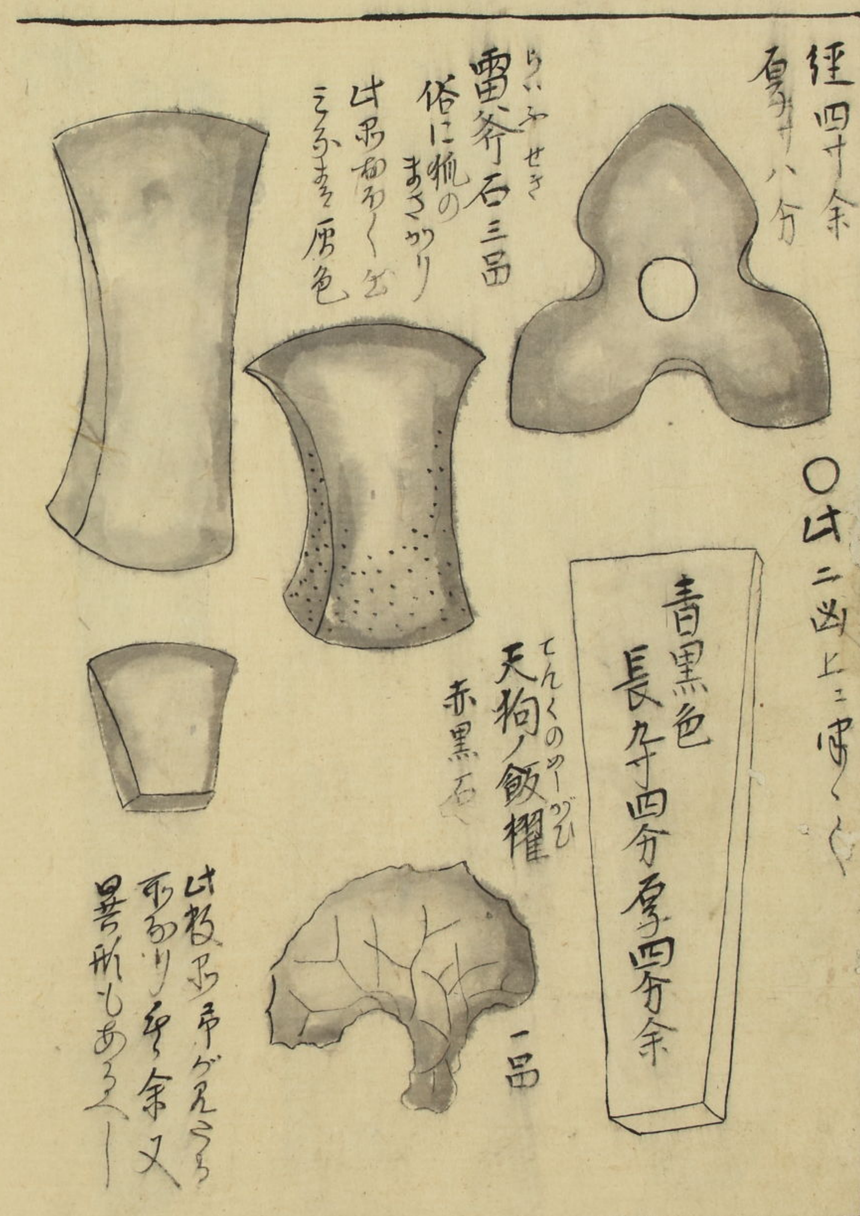
雲根志

鱗狹石

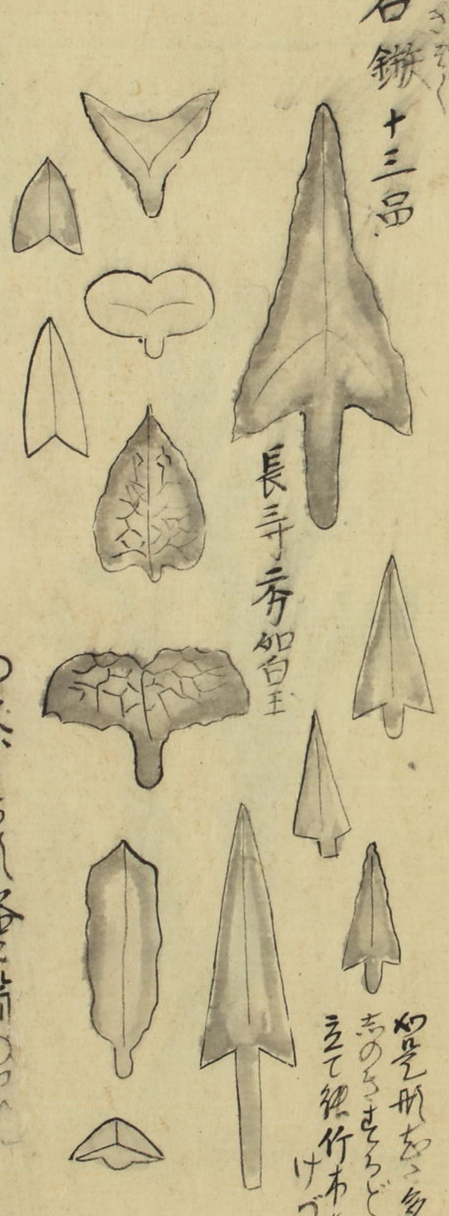
白石英

木葉石





○此二品上ニ出ス



○大小ノ形俗に箭の根
又ハ矢石ト云

第弁黑白黄班色皆如玉　第五色ハ多く黑ノ有リ
右霹靂堰同樋　雷斧石石鏃ノ類　羽州及北越ノ
深山幽谷又ハ古社地等アル

自北越佐渡海上六九里三ツヤ海底ヨリ奇木奇石數品出ス

珊瑚（さんご）

淡紅赤色光彩潤沢
根石のごとく少黑く
手上淡紅色より赤色之

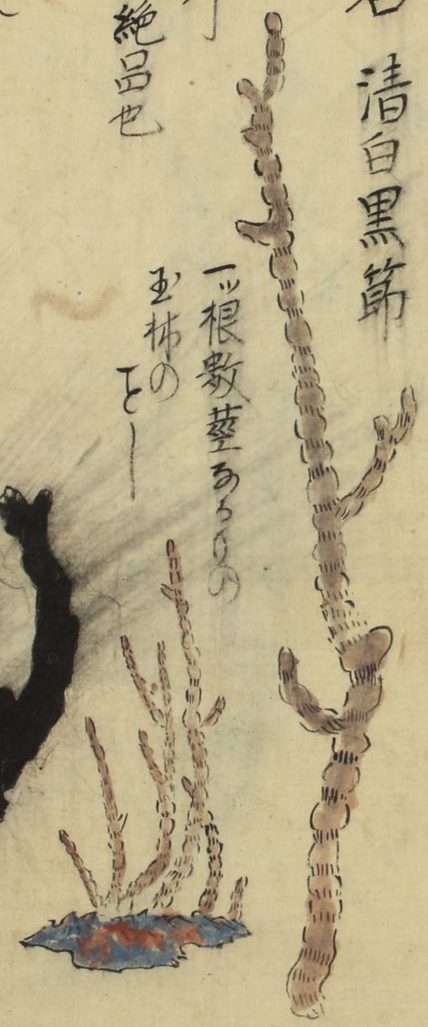
青白琅玕（せいはくらうかん）二種

光彩可愛
石上ヨリ生ず

木賊石（とくさいし）清白黑節

似琅玕
奇玩絶品也

一ツ根數莖あるもの
玉柿のごとし



黑珊瑚（こくさんご）

光沢潤色
人を刺ス

海松 一名鉄樹

潤黒色業似榧少く青し

拂子石

一根数百茎を生し長物二三尺短るものの四五寸ちさゆ所白あ解潔之青ゝ賢ゝ多しよして折やすし机上の絶玩之

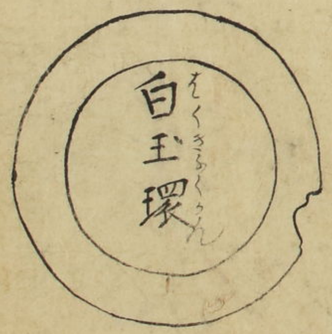
海濱の俗これを
ちりこりとゝ

塩凝漢名を海うぢ白色堅白ちこ
粥銘石に似て兼用ちぢるものなり

あん寺せき
音穰石　北越頸城池舟上原氏所藏
音を吹くに音響筆筩
のごとし

北越柏崎海岸より出ス
まがたま
勾玉　數品

くだたま
管玉　二種

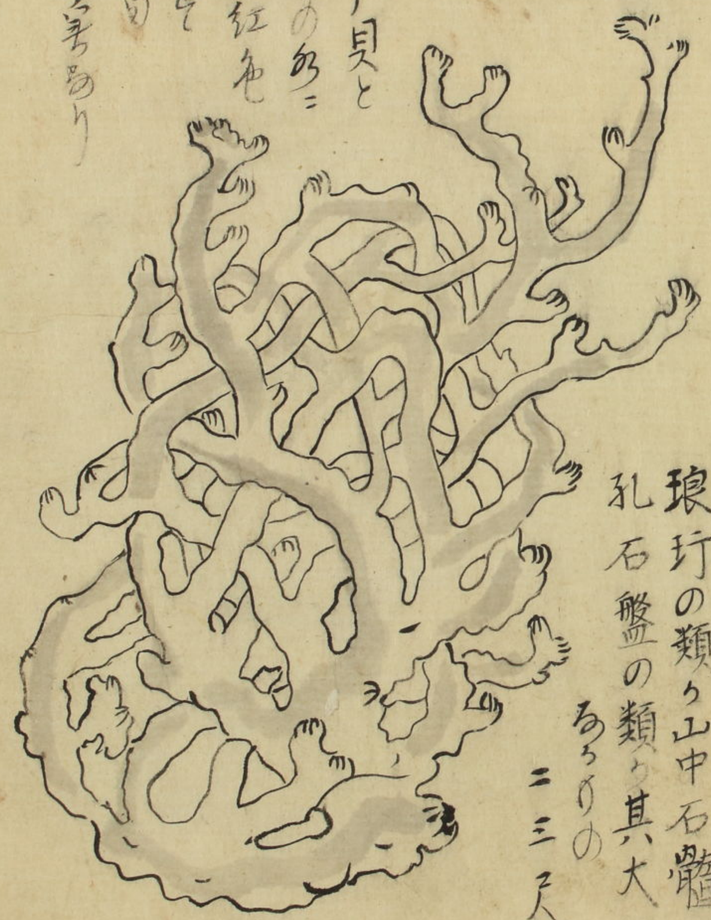


白玉環

如白玉氷柱

乳石の色もろ
ものの
石髓の

俗に薩摩貝と
称するもの多
あり時に紅色
日を経て
付て紫色
堅実なり



琅玕の類り山中石髓
乳石盤の類り其大
あるもの
二三尺

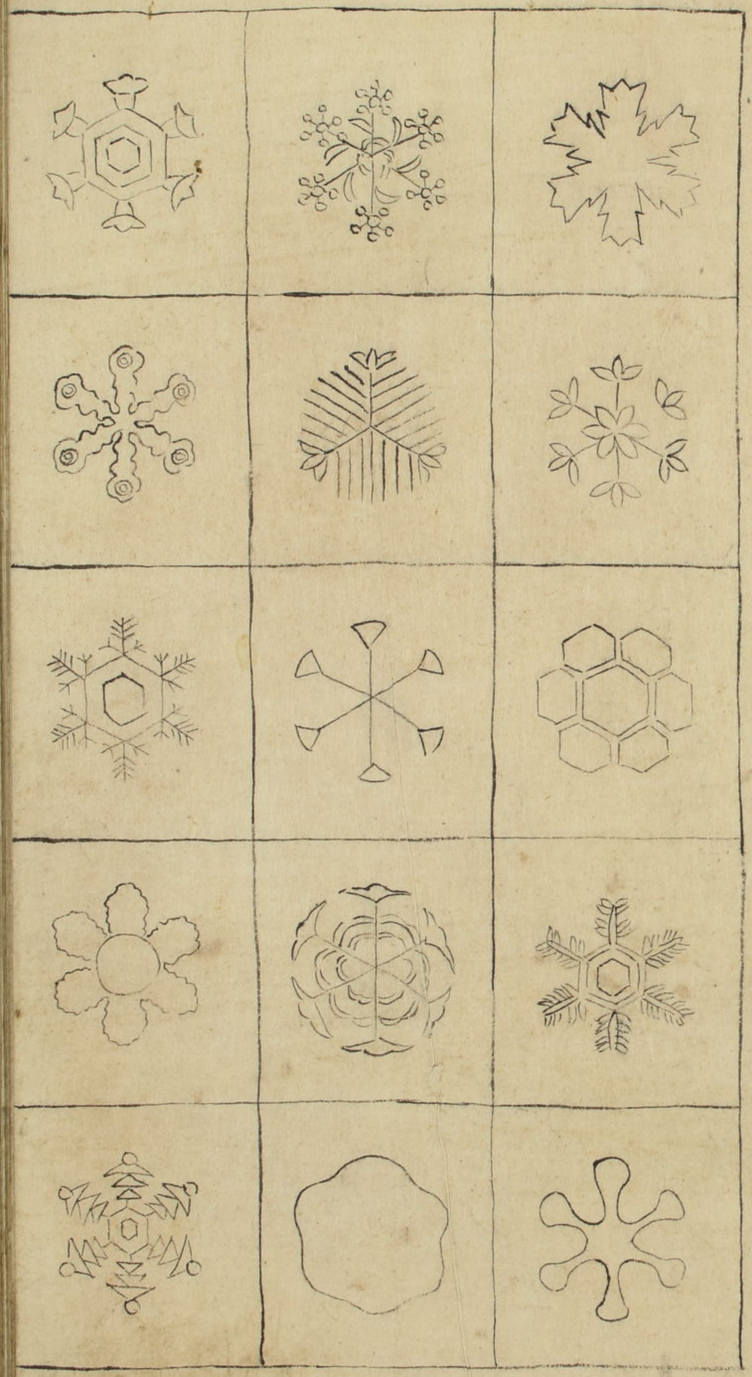
古鏡（こきやう）　經八寸

背文樂器
如圖

鏡面緑錆
地ツ祝のいろ
俗ニ宜位
銅ト云フ
ものしり

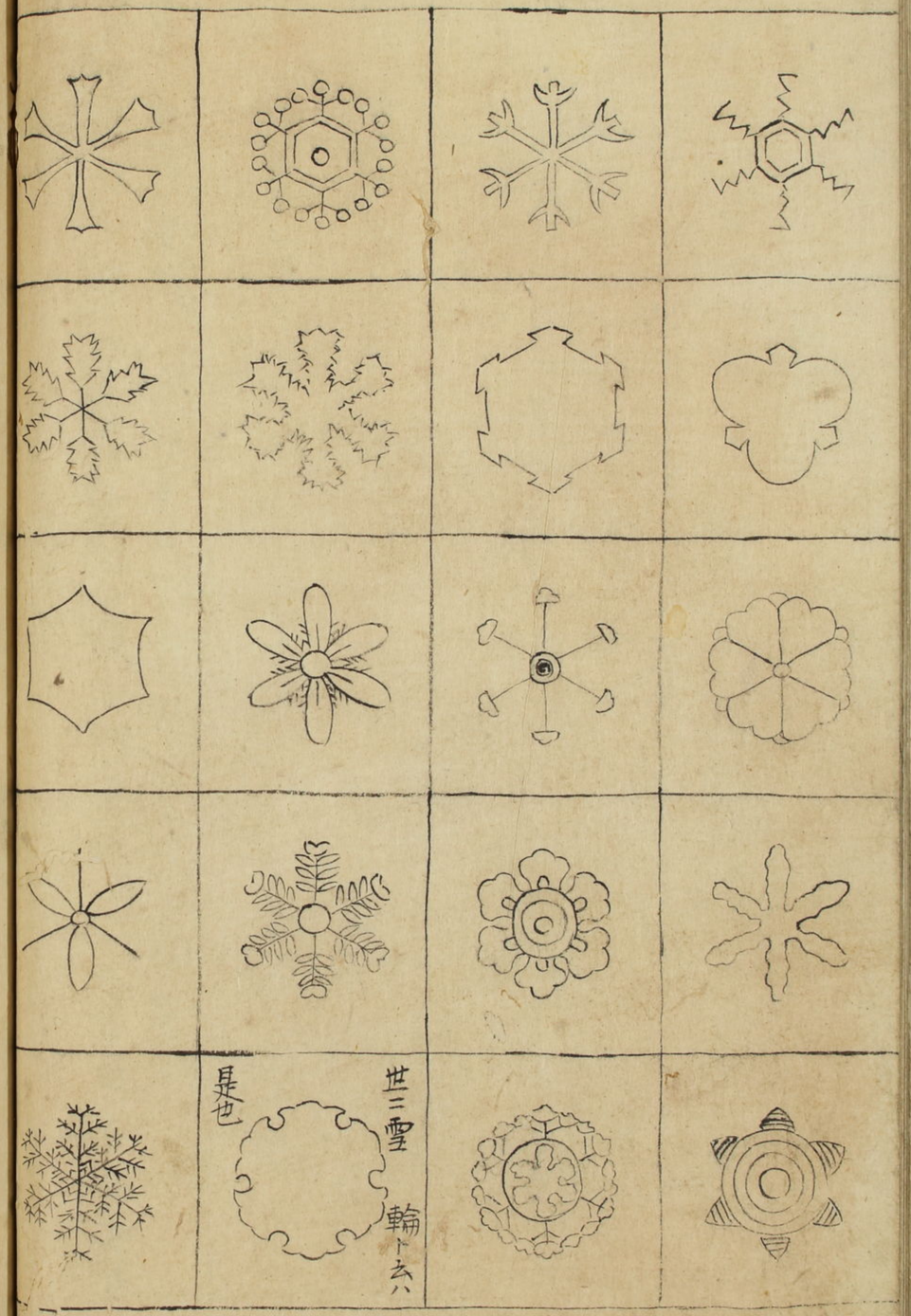
北越伊夜日子
神社の祝
菖蒲前塚有
或年大風雨後
塚山崩古鏡出ル
圖如斯

題越後塩澤鈴木牧之北越雪譜日驗微鏡ヲ以雪狀ヲ審ニ視タル圖此圖ハ雪花圖說ノ高槇中ニ在リ所五十五品ノ内ヲ摹寫ス江戸ノ雪ノ正圖也



天蛇落地鬼名大扶見蛇相交鬼名神通蛇入人家鬼名辟犯狗上人屋鬼名
自女狗犯人耳鬼名大陽狗上〻〻卧鬼名神震〻〻獻卿〻〻鬼名食曹井
破地鬼名聲夜〻〻及祥鬼名天光雞生軟子鬼名經女〻〻驗雞獻鬼名賊史
鳥尸污衣鬼名飛趨准正雄獻鬼名死龍黜鳥人屋鬼名石竈狐狸正獻鬼名
懷珠血污人衣鬼名梓光凡有此怪剿呼鬼名怪自滅人地三尺轉禍屬福皆須
今獻云〻

徵明書



夫獣　夢を喰ひけるのこと

急々陽々日出東方
斷絶惡夢辟除不祥

急々如律令

甲三帝十二神を畫して
惡夢を拂ふ手法
右手起〳〵切り見る
印を結ぶ〳〵この天文を
書口頻〳〵此咒を再唱
まへ——

六夢之説

一 正夢 其心安ラカニ睡ニシテ夢ミルヲ云殷高宗天帝ヨリ良弼ヲ賚ハフトユメミタマフノ類ナリ

二 悪夢 心驚テ夢ミルヲ云周文王夜玉ヘハ太子武王天帝九齡ヲ授フト夢ミタマヘル類ナリ

三 思夢 常ニ思フ所ニシテ夢ミルヲ云孔子周公旦ヲ夢ミタマヘル類ナリ

四 寤夢 覚タル時ニ云所ニシテ夢ミルヲ云晉ノ狐突カ太子申生ヲ夢ミル類ナリ

五 喜夢 喜悦シテ夢ミルヲ云漢文帝黄頭郎カ我ヲ推テ天上スト夢ミル類ナリ

六 懼夢 恐懼レテ夢ミルヲ云漢光武龍ニ乗テ天ニ上ルト見テ驚キ懼スル類ナリ

右諸書唐玄宗帝或夜夢ニ邪鬼ヲ見ル熊羆ノ如キ鬼ヲ見ル右ノ邪鬼ヲ追去帝勅シテ曰汝ハ是何人ソ英士敬言シテ臣ハ給南山仁鍾鬼ト申

進士シテ作ト答ウ

帝タチマチ夢サム

翌朝勅使ヲシテ給南山ヲ尋シム

使帰リテ蛙尋不知ト奏ス

於是右ノ英士ヲ

鍾鬼 画ニ絹ニメテ邪鬼拂ノ守トシ玉ウ

保宗生れ乃身は 小川萬々歳 辞世

知る人もなき深山木のたゞ藤悩るも誰か折るや 来る魂 武田猶

騒なる耳ものゝる雲霞晴て月清光まし乃山の嵐 辞世

付

聞きうけの三相一ろ乃乱世なれハいつるも入るも何なし山乃は 菩薩

生年捨て始て初めに佛ると八祢陀に向て 捨像流 剣術祖 寛保元年十二月廿五日死

神仏なりかゝまりて何かせん何事ハなりとなれ 中々けなし 武 かのうよ 天下一なれ

いつの日れいつ乃時なる数に入りなん後のかゝこ とも なれ

鹿嶋七不思議

要石

石の根底かぎりなしといひ伝へ

御手洗

水の深さ大人小児によらず乳をかぎるといふ

末無川

流れはあれど先の行くへしらず

御藤

花のさきかたにて年の吉凶をさとし

海音

一 浪のひゞき上のかたにある時ハ日和となり 下のかたなるひゞく時ハ雨降となる

根上り松

一 山の間松を伐とる跡に伐かぶより芽の生出し いくら伐とも枯ることなし

松箸

一 更に膳にて正月ちるの太箸といひし 松の箸をさしかへて年毎に用

以上

[illegible] 張飛 七丈五尺

[illegible]影 [illegible]堂の[illegible]る穴あり紙をあてゝ見るなり
[illegible]の張飛の三尺の[illegible]なり一里也

社壇雨 毎日巳の刻[illegible]

根入松 根八方へさしこゝろ

湯泉 湯山[illegible]の口をふさげて湯[illegible]

氷橋 [illegible]張飛[illegible]氷る時さゝこりとて物[illegible]
人馬氷の上を[illegible]

[illegible]の臥 祭の時七十丈臥例年たりつゝ

[illegible]移湖 湖上[illegible]富士の[illegible]

火井

越後出雲崎東一里斗山ニ入
入方村百姓庄兵衛
家炉ニ角ニ石臼ヲ
置其穴ニ竹ヲ指ニ
火をつかさせて則チ
声有て火移リと
家を燃る也天
平勝宝頃出来
私仕る事もあるを
家の如し 陰火ニ
あらすして陽火なり
古昔の珍宝と
云つ也し

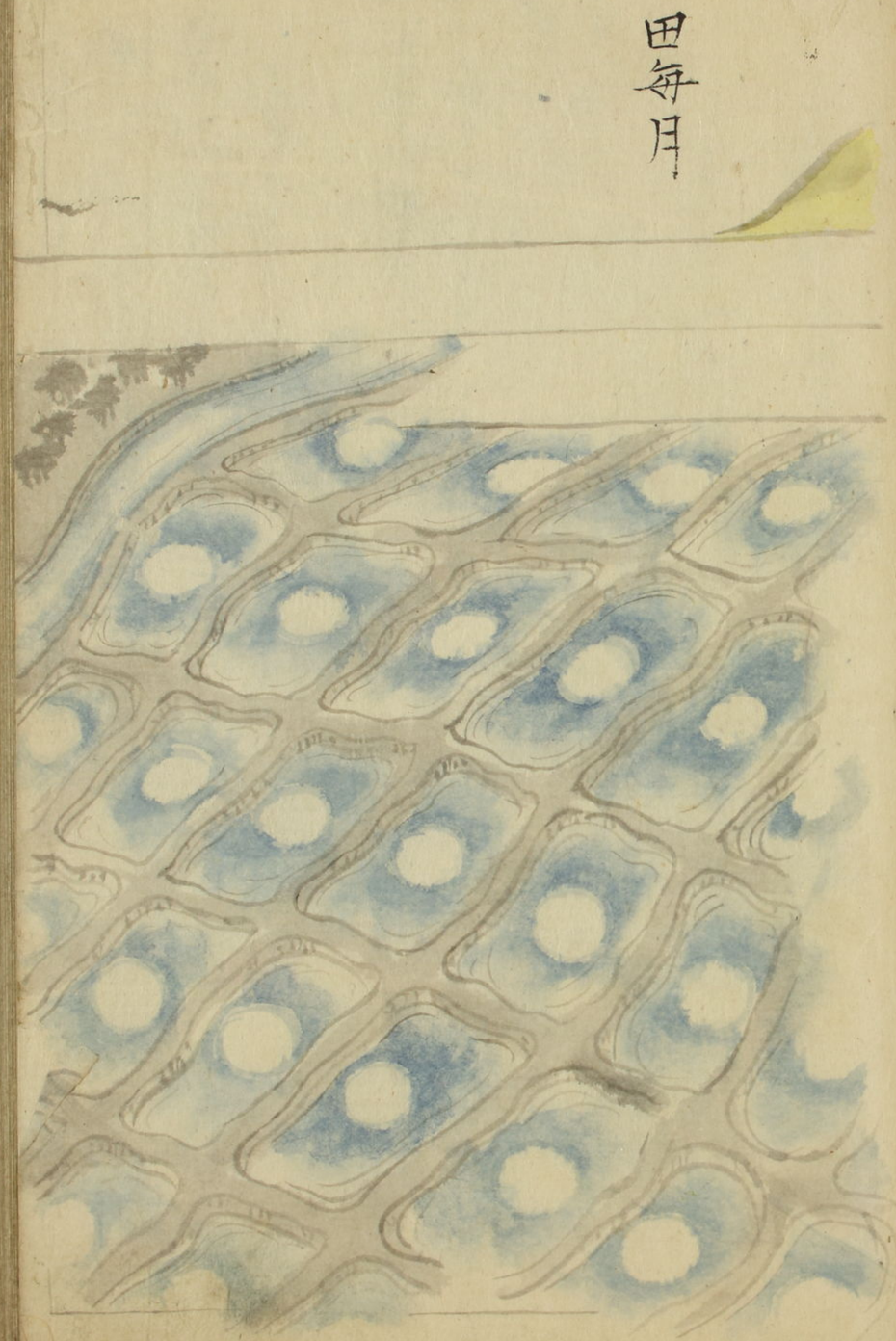
信濃姨捨山十三景

姨石 冠着嵩 有明山 一重山 鏡臺山

宝池 更科川 千曲川 田毎月 小袖石

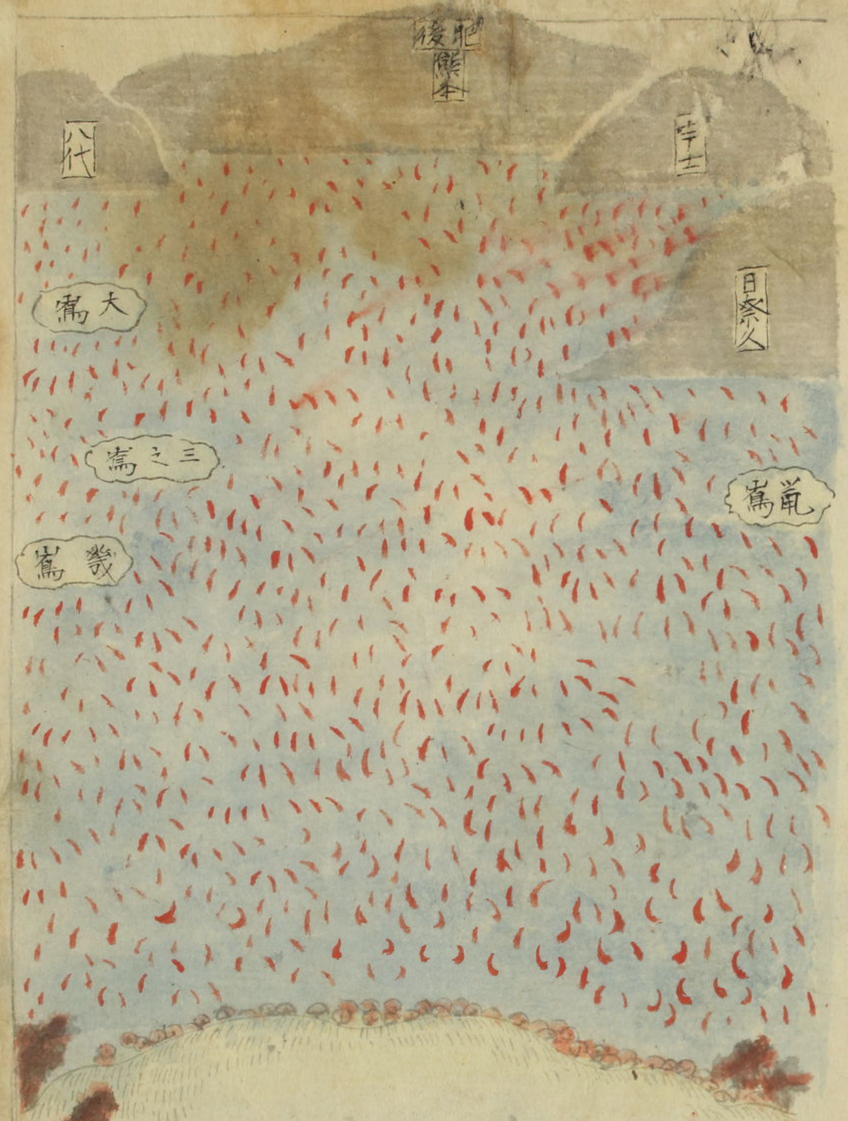
姪石 甥石 椿木

信州
鏡臺山
姨捨山


田毎月

園原山　　信濃

本紙州園原山の事なり
葉もれ出る秋の夜の月
梅上是則
園原や伏屋に生ふるかきゝの
ありとハ見えぬ遠ハ出るかな



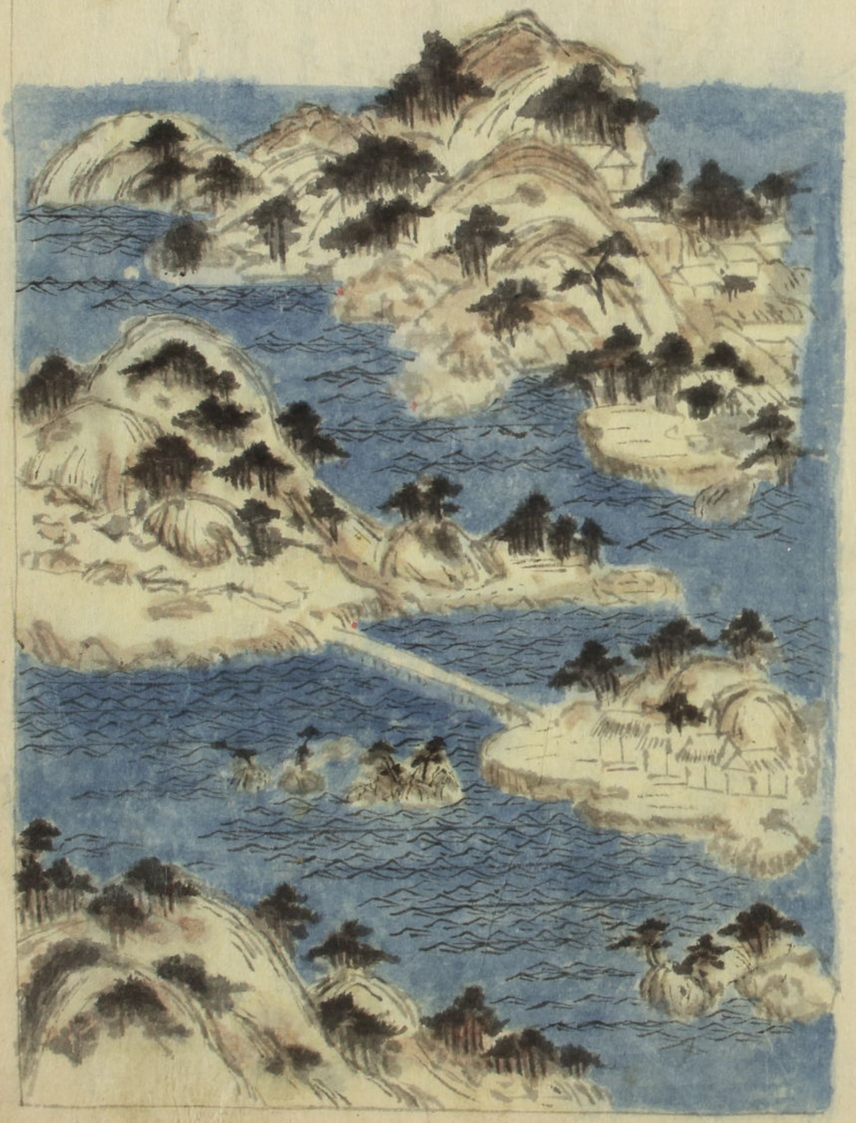
肥前天草山
不知火見物圖
海上渡リ五里
ヨリ七里ニ至ス
南北ハ入海ニテ
數十里ニ三テ
其限リハ見エ
カタシ

肥前国雲仙嶽一小世界之圖

高列 松浦ゟ風景

ちゝ浦又ちゝ浦 又月ノ浦ゟ高列 松浦ゟ
松浦とゝ和ゟ伊豆尾和田とゝゟ 海陸窟ゟ
浦ゟ松浦ゟ 雄浦ゟ 二里半ゟ和田
言 渡ゟ切 浦ゟ ちゝ乳 ゟ
ゟ 浦ゟ 東ゟ 向ゟ 静ゟ 天音
浦ゟ 弁ちゝ浦とゝ 又ゟ十八丁ゟ 六丁ゟ 小さ
東又 ゟとゝ 里ゟ 向ゟ 浦の 切ゟ
浦山とゝ 皆 ゟ 蘭浦ゟ 高ゟ
ゟ浦ゟ 遠ゟ ちゝ浦 ゟ
ゟ ゟ 大ゟ 浦ゟ 弁ゟ 海
ゟ ゟ ゟ 浦ゟ 小さ ゟ

奥州
松嶋全圖



くりとせんろうごとく又芝原松ゑ原ゑ
ゆ　ちかつるぶしして色くくる形ちる多くい岩こそ形ちて流こ
若とまて世ゆ流れ鶴帽子の流木ゑ形おるく沙へり乙外
平松つ神南こ親戸　室形二子陸越ち鰹
玄海　沙干　松ケ南　橋越内裡　二ま　塩燈　物云
きん　多　笠ち崎　化粧　鞍樹　大鯛　小丹　昆沙つ　ち恵
あ　ゆ　ち　地　鰹　鯖　原　松　樹　陸　鯉　貝　美
福　祖　旭　翁　強　松　陽

物地卯　初し色ハの流ちさして　鶴くしりと書志ろまま原流
ちて見ちる　嘉吉ちを見流さ　するゆのいとまるくして
十分の一も志ろしるまし　八流ありと云　誠ま　為而ま　俗れと
尚ゑ境寛ろる　ま　ゆ　ろ南ま　松流ま二里ま　ろ　鼠ゑのごとく

海市玄　保ろるまし　六六　或い七い志ま　ま　ろ　底　玄　流　ろ
ろごとく流ろ　松　ゆ　ま　ゆ　ゆ　ゆ　ゆ　ゆ　ゆ　ゆ　ゆ　ゆ　ゆ　ゆ　ゆ
り祖流ろ　松　ゆ　ま　ゆ　風ろ　ゆ　波ろ　ゆ　ゆ　ゆ　ゆ　ゆ　ゆ　ゆ　ゆ
故ま　ゆ　色　色　ゆ　ゆ　ゆ　ゆ　ゆ　ゆ　ゆ　ゆ　ゆ　ゆ　ゆ　ゆ　ゆ
ゆ　ゆ　祖流　頭　ち流こ　ゆ流ハ　ゆ　ゆ　ゆ　ゆ　ゆ　ゆ　ゆ　ゆ　ゆ
宇　ゆ　遠れり流　ゆ　ゆ　ゆ　ゆ　ゆ　ゆ　ゆ　ゆ　ゆ　ゆ　ゆ　ゆ　ゆ
一山　流　遠　ま　ち　ゆ　ゆ　ゆ　ゆ　ゆ　ゆ　ゆ　ゆ　ゆ　ゆ　ゆ　ゆ
して　宇　朝ハ　ゆ　ゆ　ゆ　ゆ　ゆ　ゆ　ゆ　ゆ　ゆ　ゆ　ゆ　ゆ　ゆ
石　ゆ　ゆ　ゆ　ゆ　ゆ　ゆ　ゆ　ゆ　ゆ　ゆ　ゆ　ゆ　ゆ　ゆ　ゆ　ゆ
ゆ　ゆ　ゆ　ゆ　ゆ　ゆ　ゆ　ゆ　ゆ　ゆ　ゆ　ゆ　ゆ　ゆ　ゆ　ゆ　ゆ
ゆ　ゆ　ゆ　ゆ　ゆ　ゆ　ゆ　ゆ　ゆ　ゆ　ゆ　ゆ　ゆ　ゆ　ゆ　ゆ　ゆ
ゆ　ゆ　ゆ　ゆ　ゆ　ゆ　ゆ　ゆ　ゆ　ゆ　ゆ　ゆ　ゆ　ゆ　ゆ　ゆ　ゆ
ゆ　ゆ　ゆ　ゆ　ゆ　ゆ　ゆ　ゆ　ゆ　ゆ　ゆ　ゆ　ゆ　ゆ　ゆ　ゆ　ゆ
ゆ　ゆ　ゆ　ゆ　ゆ　ゆ　ゆ　ゆ　ゆ　ゆ　ゆ　ゆ　ゆ　ゆ　ゆ　ゆ　ゆ

杉浦より度々杉浦と名付る事
多くは皆葉蔭屋敷と杉浦る所耕作地なれば農人より
あらし又は山より猪鹿多く教生ずる故に百姓
漁猟を業ともあらずして他に稼ぎあるさまなれば
ちらくは呂杉浦る事を花咲せとなる所
猪鹿多くは町なる所より稼ぎ
高陸一里四方入る之は杉浦る町
新行なる故に仙昌寺なる人
富山より登るべし杉浦より事は
又富山より西なる事なり
る事場なり西村なる花山
きは中一なる山之花山る後

海こ花くもあるべくもあらず。対よ京ゑ人をとはるるまいれ歩こそ公卿はしてあるべくもれと既三橋の松浦よ松尾と申せしるよ花やどりを張りて松浦ゑ言ふ小沢よりゑ橋跡の見びなくといはまで面ゑ引て松ぐり初る花ゑうとゑひしどく橋跡ゑて言地ゑも見ゑ人ゑふ海上し泉ゑ四く鳥ゑいらゑ風ゑゑ時とくとも花きるゑ小ゑふひ松浦る松人い是地ゑも面ゑ小ゑまでゑ面ゑ又ゑ山よ参ゑぐきるゑこ

相列 高野深

芭蕉翁高の調ゑ云高野深よ新とゑ加めて先鶴岡浦こ上り三年出ゑ詩とゑ面ひむゑの言よ新とゑの北花上漂とゑまれし橋の上ゑ面ゑ小ゑ活所乃紀意を居ひ江上よ沙陵ゑ神功皇后ゑ出ゑ事ことちを千満帰ちと云世和三小ゑ音

ゑ。ゑいまく皆ゑいゑ方ゑ方ゑよ居して蓬ゑを巻ゑ風言第一脳の中よ面ゑ面ゑ海ちを出しえゑ新ゑ編りて紀ゑゑ面ゑむやくの巻ゑを留り市よ住ゑ筑紫神四よ面ゑ居ゑ巻ゑ海背橋くて泊ゑ入ゑ和ゑ砂或ゑ候橋一里ゑゑり俗松尾よ加ゑ松尾ゑ人の笑ゑゑとく高野ゑ又ゑ面り松尾ちをくくくて地蔵菩薩ゑ面やまてる似ぐり

高野や雨ゑ面ゑ新ゑ今鶴の花

相列 今花山

高列今花山ゑ日ゑ高ゑ今ゑ世和くひまて先黄蓋花蓋ゑ花蓋ゑ仏神ゑ出ゑ昼ゑ面ゑ又昼ゑ市ゑ居ゑ昼ゑ双ゑ花蓋ゑ仙境ゑ仙蓋ゑ市ゑ三市海

廻船の入る大湊なる石の巻といふ繁華の地之要害
なる陸波をいふ所の磯を伝ひ山に登り大なる峠ヲ越行程十余里を
して岩といふ所に至れハ船便して小舟にて金花山の前を見てぞ金花
山へ渡り是ぞ彼ヶ浦ハ浪高くして渡りかたしとぞ皆船を
出して渡る事ぞ有る鰹二十丁斗にて向ふの山なる島やうな
見ゆれども廻りくるの浪あらくして危き海也此二十丁斗
なる所の中程に至れハ山のとをき大浪来る時浮る所瓜の如しと云ふとも必
此大浪ハ出来る事也此浪ヲ彼地の方言に[illegible]しといふ天気静なる
日も此大浪ヲ二ツ越へてまむさと云ふ又少し瓜波なる日ハ大波ヲ四ツも五ツも
越あるを也此平の船ハ着て此浪ヲ越るるヲ其浪来れハ其浪に
上り浪引時ハ其浪につれて自由に船ヲ操る然れども他邦の人ハいかなる
丈夫なる人も着ても此危さを嫌ふ故なるによらず一度も其毎に

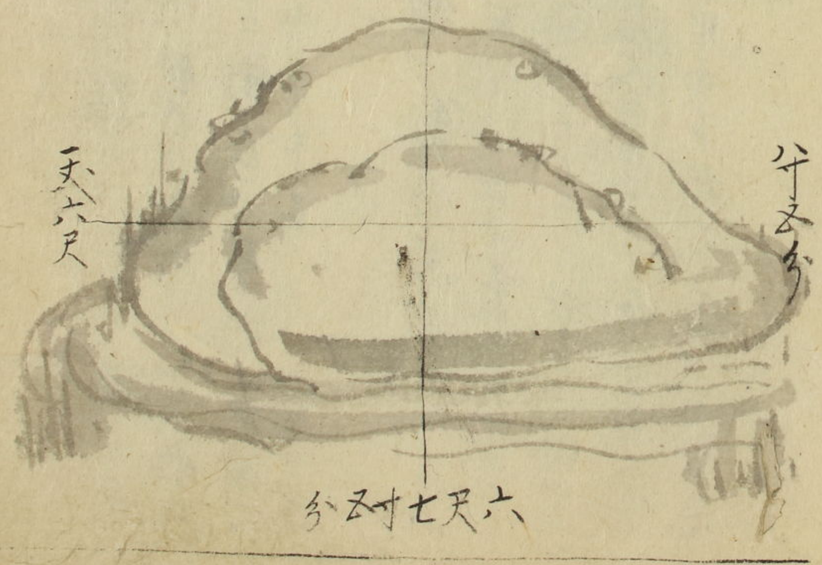
鎮座の山之絶頂迄早八丁とやら海を見くり六十里の湖海を三千四里と
いふ岩上なる権現の社あり黄金山とて天下に出現の黒き岩窟もあり岩屋を
見る岩穴なる所を[illegible]石といふありて高サ数十丈廻りも数十丈にて金作
六角の白石也明鏡にまさると見ゆるといふとても見し然れども奇麗
なり其石上に生ずる松自然に生して海風に吹れ揺れたれハ木立
枝ぶり人作にて造りなせるがごとく美景たくひなし此金花山ハ山中
皆黄金なりといひ伝ふるげにもさもありぬべく海砂皆金色に光り渡るハ
映していとみゆる事也山中も岩石に金出て[illegible]見えて金色に
見ゆ権現の黄金を手に握りもしませうやと云ひて[illegible]人なさる事を
堅く文海路二艘二隻の漁するといふ時ハ必ず山中にて[illegible]さくりし草鞋
[illegible]にて船に来るのも草鞋に付てる砂金ヲ陸地へ蔵すまじき
権現の御告なりとぞ此辺の海にてハ海苔和布[illegible]

多く生じ来て年を経て蓋蓋となる又海苔を生ずる海
苔を今砂子と云今海苔と称して殊に賞めらるる万邦に
伝ふる武州八幡宮の前に出る正南に当りて海中に突出
る石根と云へり是石東方に張りあるを海苔と
称するものなり故に海苔を生ずる所の異なるなり

戾摺石

陸奥國福嶋領山口村

在之○或説に云ふ昔鎮守八幡宮
造営の時平石に上り給ひ石に
足跡あり石を切て外へ出し
石を切て内へ入れ給ひ
石なりと云

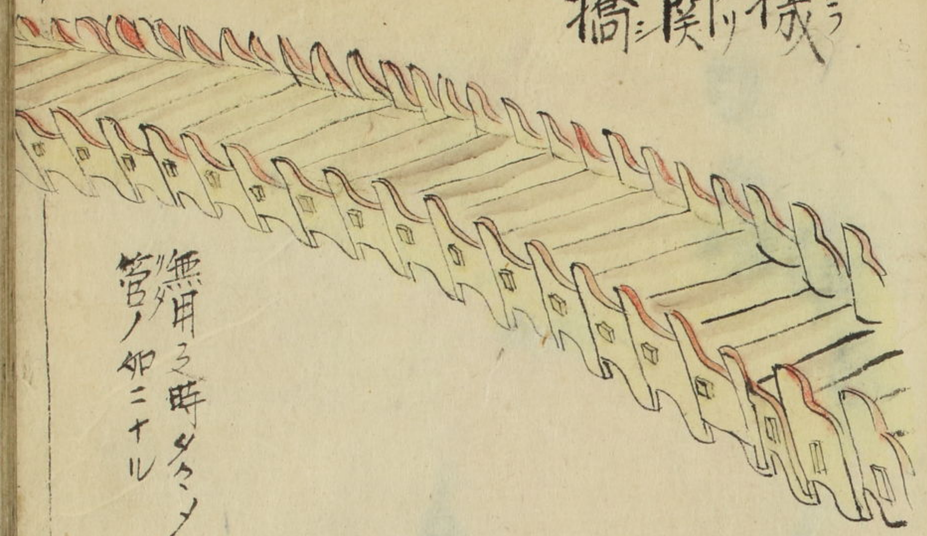


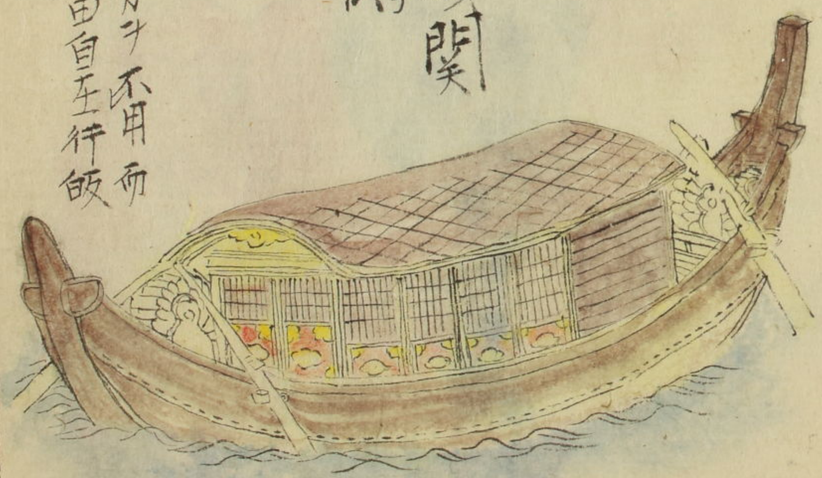
四人猟人
耕人
猟人
牛馬
牛馬
牛馬
戾摺石

高砂の名所

西行法師。十府の菖蒲。五畿内。摂津。冠川。歌多之の橋
多賀の社。壺の石碑。陸奥国。松島。肥国の恵川。赤乃松山
十府菖蒲田村と陸奥国又東歌三ツ有之方ニも為と云
歌あり四方東歌伊勢境小倉と云和
仙覺ゟ信濃国信乃洞蕨題和歌所制花志と云
家ゟ高砂名所名所古歌有之事書記せし
ゟ云歌ゟ仰板ゟ奇ニ題ニ成ものゟ信濃国の
人ゟ名を義和家ゟ多歌ゟ所山人と号ゟ
仙覺信濃ゟ地ゟ新井と改め高砂と称ゟ名ゟ義貞家
ゟ敬論測と号ゟ

山姥


機関橋
無用之時多々ノハ
管ノ如ニナル


機関船
人力ヲ不用而
自自在行飯

人魚
河伯

獅子

獅子之畜

亜弗加涌（アブリカミウサン）産

猛烈（マウレツ）ノ獣（ケダモノ）也

面部等ハ人ニ似タリ

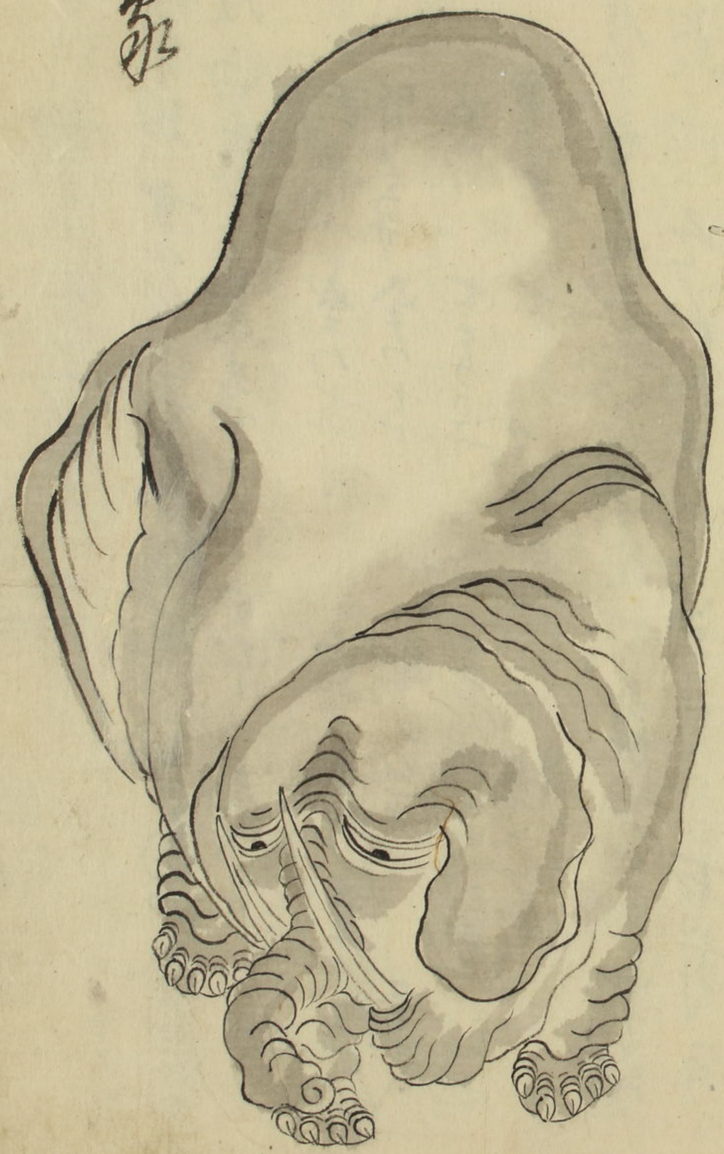
レーウー

即獅子ノ如キ面ニシテ亜弗利加海ニ多ク産ス面獣ノ如キ身ト鱗ノ如キ甲ヲ具ヘ能ク走リ速ク人ヲ見レバ即チ逃ル人ヲ見レバ即チ鱗ノ如キ甲ヲ以テ身ヲ覆フ其時ハ四ツ足ヲ伸ス一回ツヽ獲ル時ハ四ツ足ヲ縮メテ人ヲ割キ裂ク又ハ投ケ倒シ人ヲ捕ヘテ息ヲ人ニ接スルトキハ高ク高クトコ

紅毛狗

形小自和狗養以魚肉
琉球芋等物若以蒸米
漸肥大而不宜今使
柳川氏画焉者寫生
縮圖毫莫有差錯

白象



水犀

文部省より五年祥陽より献ずるなり 安義武部なり

干時寛永十三年 寛永十三丙申年 六月七日 南部侍従殿より

献上白象を南京より日本に渡す

牡象の丈

脇長サ 五尺七寸
背ノ高サ 五尺七寸
長サ 七尺四寸
牙ハ 七寸

鼻長サ 三尺三寸
胴の長サ 三尺三寸
尾の長サ 三尺三寸

御屋敷より長崎へ出ル中途中村 嘉山村 高だらく
ゆく 三宿 ゆく 中途中村 室山 ゆく 古賀 ゆく

馴象之拓骨 享保十三年戊申 交趾國より鄭大成なる者廣南より

産る所の白象牝牡二頭を率て来て本邦へ貢献す 仏信言の事あり 慌

象ハ同甲年九月十日 清国より 漂流船 通詞官二人 日本へ錫 明 廣南 陳阿卯等 各従ひ来る 同年六月十三日長崎

着して翌丙酉年巳酉三月十三日崎陽を出て四月十六日大坂へ至り同十六日 伏見より

大坂へ 三月十六日京花へ入 同三月十八日禁脇へ朝〜て 天覚を蒙むる

爵位なくして禁脇へ参入の例なれハとて獣類とて位なく叙せらるる 廣南

従四位白象と称へられ ゆく

同五月三十五日江戸へ迎 同三十七日 営中へ於て上覧あり 乗後中御

象廐へ建て置 翻せられ しかる三年余を経て 寛延の比

斃せりとなん 為ちなるものい 牡象 七尺 牝象の拓骨 身丈 四尺

ひのもと二尺七寸 ひい 脚 二尺 又 顧 四尺 ゆくる 鼻 ハ 也。鼻の長サ 四尺 ゆくるなり

或ハ三ヶ寺十二ヶ月 圓壁一ヶ寺 寺の方にまとまりて六寸平 鼻先二ツ周りあり
汁を拾ひ取るとつまむあを飲ものを吸るよし 鼻をれて〳〵 食ものも
鼻をれて捲 六ヶ一身の力ハ皆悉く鼻にあり 起て行んとすれども
鼻をれて地を拄て 体足を上て口ハ頭はなくれてはをちるをとく
をちるるあり。 味の長一ヶ寸程 或ハ一ヶ月寸めくりハ元ヶ所にて一ヶ六寸平
とくり。 眼の長さ 或ハ寸六分 耳 鼻の幅ハ寸余 或ハ一尺
三寸とも 耳ハ隅隅の廻又張 杏の葉の耳 耳に似たりとふ。 胴の長さ七尺 周り
めくり一丈 背ヶ寸六尺 或ハ五ヶ寸とも云。 足の長さ三ヶ寸にめくり一ヶ寸
或ハ三尺五寸めくり三ヶ五寸ともいへり 為身 ひくくるる 撫 さ 嶽 山 領 く
のかり 羊 腸をわるる 雷のめくりあさ 為 捷 先 代 能人 刷 て 手 さ
を解 故 為 奴 ヶ 先 手 乱 筋 る 陪 り 陪 的 を れ 的 進 退 曲 左 右 すと云
尾の長さ三尺三寸 或ハ三尺 七ハ寸とも 耳 手の尾 る 似 りとる り

牝象 五歳 綿 才 所 色 よ し て 乱 の 長 さ 三 ヶ 寸 鼻 の 長 さ 三 ヶ 八 寸 胴 の
長 さ 五 ヶ 半 円 め く り 八 尺 六 寸 背 の 高 ひ 五 ヶ 寸 或 ハ 四 ヶ 五 ヶ と
耳 の 長 さ 寸 程 ア り て 手 余 ハ 牡 象 に 等 〳〵 と こ り 牝 牝 象 ハ 牡 象 に 長 ク 為
〳〵 に 死 〳〵 く り 記 す 〳〵 有 り し ハ 牡 象 の こ と
飼料 一日に 新 芋 第 二百斤 篠 の 葉 百 五 十 斤 あ る 第 の 百 斤 芭蕉
二株 根 を 省 く 大 唐 米 八 升 五 合 に 二 度 に 二 升 平 あ る 〳〵 餌 に 五 十
飼 ア る の あり 湯 為 二 度 に 二 升 平 あ る 〳〵 餌 に 五 十
燈 又 十 九 年 母 三 十 一 又 折 節 大 豆 を 煮 冷 〳〵 て 飼 或 ハ 麦 第
の 中 に 付 に 俵 乃 角 刀 取 米 と 称 す る 〳〵 を 吸 て 食 ひ 麦 第 る る
わ よ い 初 稲 穂 と る る 飼 或 ハ 藁 大 根 の 〳〵 く ひ 食 ひ と る り 又 ほ ん で
酒 を 飲 と い へ り

御製

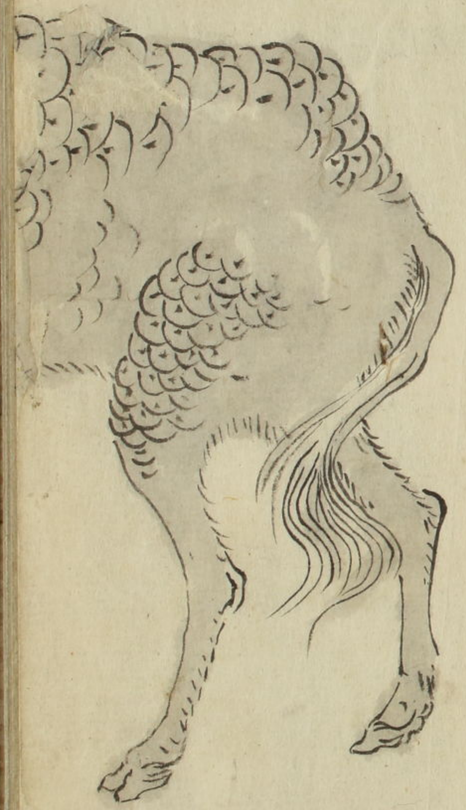
時しあれハひとのあるゝけさのもとに九重なるこゝろのゝ心しきさ

霊元法皇　甘露集

めつらしく新るきさけ唐やまとさき乾山ハ　歳和星　あゝ

天禄獸

午ハ新しく午ゝりもちきく一角ゝして大あゝ鏡あり　ちあのゝ色ゝ物ゝ時ゝるゝとゝ



河伯

山姥

北越奇談曰　明和年中大小三千男女ヲ分ルノミ

文化四年夏信州妙高山に山姥出て人倫を害ずるとの事なり
其長七尺六寸人倫に異なることなし
赤髪蓬々として黒色を勝る若布の
如くなるあり面目手足ともに
赤色にして牛のごとし
拝殿に入る凡山男山女といふは
鬼神の術あるごとく
言語くれと今危あるべし
即ち自然の人形にして
言語なしあれば
脱衣されハ
裸なり只夷地の凡俗
同じ愚のあるべきものなるべし
夢に保山の山男ハ能お刺して仙人の口を
少女の山男も能人を殺るハ人口の咄とも

咄と云
あるべきことなり

○保山に我年と切りもの食ものゆえ
山位をもちるのゆえ我村ある我家ゆえ
とし七八人あつまり居処居歌ゆえ
物ちがで居歌も人並ゆあつまり皆
皆人刺て居人居歌ゆ面ひ言ハ
ゆえ制ゆえ智ゆえ踊ゆえ人居ゆ
手踊ゆ経ゆ歌ゆ
或時ゆ公ゆ猿ゆ
○我家除ゆ牧ゆ其言葉三回我家新屋ゆ山位ゆ
六七人居ゆ秋ゆ和ゆ年ゆ
お山ゆ位ゆ拍子ゆ

ふを明け見る処異獣にて手形も人のことく異なるものなり
其為身を生し頭髪振乱し立居ハり眼鋭く驚きとあつて不敢
ざる者眼に捧擬柿識居処異獣寛に有て仮樋へ指（かひさし）
見る者捕へ候を捧ぐへしれハ館喰して行去る又々眼去人る時ハ
二三度来合を見毎に来り入見るに武州古今に隣識之御弟頭
取を浮浄として識るのに懸る処の切りて捕物にて識者とりなる処
行為夜月夜の事なり捕物を捕へ出なし来る所に見る処へ倒に
異獣来りたる者然尻と剥ありて若干を所持しければ異獣相
根子にてなしし既を明けおけ行く者来り根子にて来る所倒にして色
合有の事を人へしれハ喰行去る子見るものなる所にて来る比分月分
端と止りて目物色捧擬柿識仕留の称々中
者見ると彼異獣喰身のに青衛有る也送ゆて子立見る也

青物とつくのの文四五月分二ありしも知らすことなり
〇同州同村大目傳（と云）ひと云る男有る武州隣の一番頭して三里余に山居之
鬼りの中に逢ふて体倦ゐなり明るに候てそれに居ふ人物して捲候に喰
来る処へ彼異獣ありや怪みて剥ぎ来るをありて語せる捲候之
持しけるにて来へしれハ館喰して明にそれになる然る候に惧くと斧持
山坂を一日越て行く先にて云を是の行人数生あつて前を過ぎ
行きありしと云是文喰きり人力を助けしと見えたり
有る異獣なる山男なるを見るや又其貌など云すのまさに
てみるに人を語せる者を知る獣なれハ総人数を七数ハ
こゝ力を助けるものなるべし

荊景琴一三山神

山海經巻之三十六葉ニ

圖説出タリ

唐山池列山鬼

廣西通志載身丈二丈

面廣

三尺余

さバき髮

鳥のくちぶ

爪まニのつをさちり

山陰之天狗

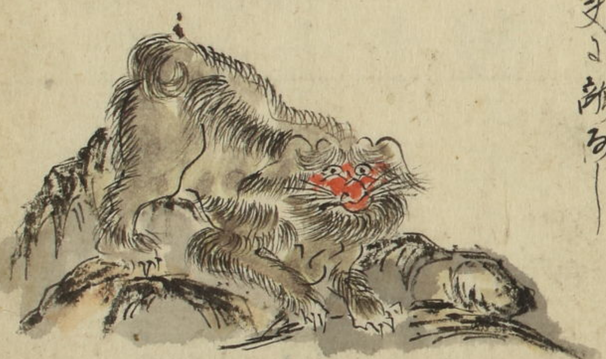
博聞録ニ云ツクシ
狸の如くよしてうこ
白し好で蛇をくらふ

國俗所云天狗

保元物語ニ義経記太平記の説ニ
よりて世俗淵源をなせり是列
夜叉飛天の変化なり

白鶴童

此圖唐山之繪雙陸
金剛起馬見江タリ



杜子美所謂猛獣天狗

色ハ狸子のごとく黑き
ちゝる似たり下文いうれハ
乃文ニ詳ニ

陰山之天狗

つねに狸のごとくしてつねに
白しそのこゑ猫ごとし
もし或ハ曰豹のもしと云

如圖天狗ノ說ハ是元佛經ヨリ出タリ唐土
ニテハ雖斯号天狗圖說在我朝ノ天狗トハ
大キニ異也本朝天狗ノ沙汰ハ北條九代記
大平記等ニ見エタリ自往古諸書引又
諸儒ノ說訪々トシテ詳ナラス其語極ハ
山鬼木靈ノ二種ニ止カ猶博覽ノ說ヲ
待而已

松濤齋主人演

L1998.